

## お不動様のご加護を頂く

言わずもがなのことですが、東日本大震災と原発事故抜きにはお話が始まらないこの夏です。先年の阪神淡路大震災の記憶が、3月11日の震災以来時空を超えて生々しくよみがえり、その状態が今も続いている気がします。自然災害の猛威は地球誕生以来の大自然の営みに過ぎないと分かっているにしても、限られた人生のなかで直接遭遇すれば、私たちの日常生活は簡単に吹き飛ばされてしまい我が身の不運を嘆かずにはいられなくなります。まして、人災ともなればその思いは一層複雑だと思えます。

さて、わが国を代表する倫理学者の和辻哲郎は、著書『風土』の中で、モンsoon地域における人間の存在の仕方を『モンsoon的』と名づけました。日本人はモンsoon的で、受容的・忍従的であると云います。さらに大雨と大雪との二重の現象において日本はモンsoon域中最も特殊な風土を持つので、それは熱帯的・寒帯的の二重性格と呼ぶことができます。

豊富な湿気が人間に食物を恵むとともに、同時に暴風や洪水として人間を脅かすというモンsoon的風土の、したがって人間の受容的・忍従的な存在の二重性格の上に、ここにはさらに熱帯的・寒帯的・季節的・突発的という特殊な二重性格が加わってくるのです。あたかも台風が突発的な猛烈さを持っているように、感情もまた一から他へ移るとき、予期せざる突発的な強度を示すことがあり、だからそれは感情の昂揚を非常に尊びながらも執拗を忌むという日本的な気質を作り出したといえます。

日本人は、自然を征服しようともせず自然に敵対しようともしなかったにもかかわらず、なお戦闘的・反抗的な気分において、持久的ではないあきらめに達したのです。忍従に含まれた反抗はしばしば台風のなる猛烈さをもって突発的に燃え上がり、この感情の嵐のあとには突如として静寂なあきらめが現われます。この「しめやかな激情、戦闘的な恬淡」こそが国民的性格であると和辻は結論づけています。

私には『風土』のモンsoonを地震・津波に置き換えることで、読めば読むほど3月以来の日本の有り様が読み解けるように思われます。

原発事故同様に人災の福知山線事故から6年が過ぎました。浅野弥三様より奥様の七回忌を機に、災厄から守って下さる不動明王様を境内に建立してほしいとのお話があり、役員会で検討の後、費用をご負担いただき松林寺として建立させて頂きました。

不動明王様（お不動様）とは、すべての障害を打ち砕き、仏道に従わないものを無理矢理にでも導き救済するという大日如来様の化身です。恐ろしいお姿ですが内心は人々を救済しようとする厳しくもやさしい慈悲に満ちております。右手に持っている剣は利剣といい、仏の智慧で迷いや邪悪な心を断ち切ります。左手

の綱は羅索（けんさく）といい、悪心をしばり善心をおこさせます。背中の炎は迦楼羅焰（カルラエン）といい、迦楼羅とは毒蛇を食べるといふ鳥で、この炎で毒になるものを焼きつくします。足下の岩は磐石（ばんじゃく）といって、堅くて大きな岩のことで迷いのない安定した心を表します。火焰の中に住まわれるのは「火生三昧」といって、衆生の煩惱を大智慧の火で焼きつくして、お悟りに導くためです。

迦楼羅焰とはあたかも『風土』の「しめやかな激情、戦闘的な恬淡」を活写しているように思えます。迷う私たちの心は迦楼羅焰のように揺れ動きます。お不動様のご誓願は広大無辺であって、しかも「無相法身、虚空同体」といわれており、念ずる人の願いによって、どんなご利益でも受けることができ、迷いの心もたらす災厄から救い守って下さいます。現実の災害と過去の記憶が私たちの心を不安で揺らす今こそお不動様にお参り頂きたいと存じます。



あみたあばあ



No.28

浄土宗 松林寺

<http://syourinji.com>

